

国際政治学 核抑止論と軍拡競争 Nuclear Deterrence and Arms Race

上智大学教授 猪口邦子 2001.4.20.

2002/4/3

Syllabus シラバス 講義構成

Part I Security and Foreign Policy (Issues) 安全保障と外交 (理論編)

Contains of the Cold War 冷戦の起源と展開 (2001.4.13)

- Nuclear Deterrence and Arms Race 核抑止論と軍拡競争 (2001.4.20)
- Arms Control and Disarmament 核軍縮と軍備管理 (2001.4.27)
- Regional Conflicts during the Cold War 冷戦下の地域紛争 4.
- Collective Security and UN Peace-keeping 国連と集団安全保障 5.
- Ending of the Cold War and Deep-rooted Conflicts 冷戦終結と根の深い 6. 紛争
- Japan's Foreign Policy and Its Problems 日本の対外政策

Part II Theories on War, Peace, and Negotiation 戦争、平和、交渉 (理論編)

- World System 8.
- **International System** 9.
- Approaches: Realism vs. Liberalism/Rational Choice vs. Constructivism 10.
- Levels of Analysis and Modeling 11.
- **Game Theory** 12.

Part III International Political Economy

Part IV Theories on IPE and Global Issues

Part V Global Issues

©Kuniko INOGUCHI



- ◆ 文献 核抑止論と軍拡競争
- ◆ 冷戦期の軍事戦略と軍拡競争の構造
- ◆ 大量報復戦略から柔軟反応戦略へ
- ◆ 核兵器の射程による3分類
- ◆ Eisenhower's Military-Industrial Complex 置産複合論
- ◆ McNamara's M A D 戦略と核抑止論
- ◆ 核のTriad 3本柱と非脆弱なる第二撃
- ◆ Brezhnev Doctrine, 1968 プレジネフ・ドクトリン
- ◆ Nuclear Arms Race核單拡競争
- ★ 米ソ核弾頭総数
- ◆ 狙うのは都市か基地か Counter-value vs. counter-force strategy 核の冬 Nuclear Winter
- ◆ CEP Circullar Error Probable 半数必中半径
- ◆ Web-Sites Citation 核実験 1945-1999

2002/4/3 © Kuniko INOGUCHI

文献 核抑止論と軍拡競争

1)猪口邦子『戦争と平和』東大出版会、1989,6章 2.ブルース・M・ラッセット『安全保障のジレンマ』 (鴨武彦訳)有斐閣、1984.

- 3. 岩田修一郎「米国核戦略の変遷』『国際政治』 90号、1989年、54-69頁
- 4.中西輝政「拡大抑止ーー歴史的変遷とその本質」佐藤誠三郎編『東西関係の戦略論的分析』 日本国際問題研究所、1990年、75-108頁
- 5 . Adam B. Ulam, *The Rivals: America and Russia since World War II*, New York: Viking Press, 1971

冷戦期の軍事戦略と軍拡競争の構造

冷戦期份軍事戦略

- 1. 大量報復戦略から柔軟反応戦略へ
- 2. **核のトライアッド**
- 3. 抑止の理論と相互確証破壊(Mutually Assured Destruction=MAD)
- 4. **対都市戦略(**counter-value strategy) **対兵力戦略(**counter-force strategy)
- 5. ターゲッティング・ドクトリン

軍拡競争の構造

- 1. 非脆弱なる兵器をめぐる競争
- 2. 作用-反作用としての軍拡課程
- 3. 命中精度 = 半数命中半径(CEP=circullar error probable
- 4. SDI (Strategic Defense Initiative)の理念と破壊
- 5. 陸の軍縮・海の軍拡の構図

2002/4/3 ©Kuniko INOGUCHI

太量報復戦略から柔軟反応戦略へ

- ◆ 1950年国務長官Dulles は大量報復戦略(New Look Strategy)を発表: 自らの戦略的利益が損なわれる場合には、局地戦争も含めていつでもどこでも核兵器を使用するという核中心戦略。「われわれが選択する手段と場所において、即時に報復できる大きな能力(強大な核戦力)を保持すること」解説 1953年に朝鮮戦争が終わり、国防費削減への圧力の高まるなかで、核に優先順位を置くことを明確化。
- ◆ 柔軟反応戦略(1959年にダレス死去) 1961年に発足したKennedy民主党政権がMcNamaraを国防長官に起用して戦略転換を図る。柔軟反応戦略は、戦力の使用については選択的だが、戦略の準備については小規模な武力衝突から全面核戦争に至るすべての段階で米軍事力の優位を追求する。解説実際には道義的な観点からも核兵器が使用しにくい認識が広がったため。しかし後に米国の建国以来最初の敗戦となるベトナム戦争で必要であった対ゲリラ機能については認識されていなかった。

核兵器の射程による3分類

- | 戦略核(Strategic Nuclear Force) =射程 5500キロ以上(米ソ首都間は8000キロ)
 - ◆ 中距離核(Intermediate Nuclear Force)= 射程500キロから5000キロ
 - ◆ 戦域核(Tactical Nuclear Force)= 射程 500十口以下

2002/4/3 ©Kuniko TNOGUCHT

Eisenhower's Military-Industrial Complex

渾産複合論

At the end of his tenure as president, Dwight Eisenhower gave the following speech -- warning of the growing influence of the <u>"military-industrial complex</u>.(任期の終わり アイゼンハワー大統領は軍産複合の影響の増大に関して警 告する演説をしている)"He refers to the increasing military buildup in the United States throughout the 1950s. This growth of the defense industry fueled the nation's growing economy, and by 1960 amounted to more than half of the <u>U.S. federal expenditure(軍拡は1960までに連邦政府予算の半</u> 分を占めるうになった). Much of the civilian population was financially dependent on defense industry, and most universities thrived on the increased research opportunities (多くの民間人が軍需産業に依存し、大学は軍需で潤った).He warned of the consequences of increasing the military's impact on the national economy(大統領は国民経済に占める 軍事のインパクトに警鐘をならした)。 ®Kuniko INOGUCHI

McNamara's MAD戦略と核抑止論 In the following speech, given September 18, 1967, Robert McNamara, then U.S. septetary of defense, explains "mutual deterrence" (1967年にマクナマラ国 阪長官は治互確証破壊について演説で述べている). "According to this policy, if the Soviets knew that an attack on the U.S. would guarantee the equivalent destruction of the U.S.S.R., then the Soviets would be less likely to attack (2 の政策によれば、もしソ連が米国への攻撃が同等の破壊をソ連にもたらすことが確 実であることを知っていれば、ソ連は攻撃をかけにくいことになる). Mutual deterrence meant that the weapons buildup would continue, and new technology would enable U.S. missiles to be launched, even if the United States were to come under attack(新たな技術は、たとえ米国が攻撃された場合 でも、米国がミサイルを発射させることを可能にするであろう) ".

解説: 抑止deterrence)論とは、 敵の先制攻撃による打撃を受けたして も、自国側の兵器が壊滅せずに第二撃(報復力)が残り、敵に同等の 被害をもたらす能力があることが確実であれば、相手は攻撃しないと いう考え方。この考え方に基づき、第二撃力が残るための質の面での 軍拡競争が激化することになる。地上発射の兵器体系は第一撃で壊 滅的破壊を被る理論的可能性があるため、海底を自由に移動して一 斉破壊は理論的に不可能な潜水艦発射弾道ミサイル(SLBM)等海洋 核の開発が競われることになる。

2002/4/3 ©Kuniko INOGUCHI

えのTriad 3本柱と非脆弱なる第二撃

を:ICBM 海: SLBM

空:戦略爆撃機

- ◆ 非脆弱なる第二撃invulnerable second-strike: a相手からの第一撃を生き延びた核兵器により 確実に報復できる能力:理論的に必ず第一撃を 生き延びる兵器の開発 海に潜伏し、移動す る核 量から質の軍拡へ
- ◆ 今日の<u>陸の軍縮・海の軍拡</u>につながっている。

Brezhney Doctrine, 1968 ブレジネフ・ドクトリン
In the Mallowing speech -- given in November 1968 at the Fifth
Congress of the Polish United Workers' Party -- Soviet leader
Leonid Brezhnev justified the August 20 invasion of
Czechos ovakia, stating that Czechoslovakia's detachment from the
social ist community would have come into conflict with its own vital
interests and would have been detrimental to the other socialist
states. (チェコの社会主義圏からの乖離は自己の重要な利害に反し、また他
の社会主義諸国にもよくないことになったであろう)"

This justification would remain a policy in the future to protect communism from outside influences and secure the centralized power of Moscow over its satellites. It was known in the West as the "Brezhnev Doctrine" and would remain influential until 1989, when Mikhail Gorbachev denounced the policy (この介入正当化はモスクワに集中している衛星国に対する権力を温存することと 圏外からの影響から共産主義を守るというその後の政策につながった. 西側ではこれはブレジネフ・ドクトリンとして知られ、1989年にゴルバチョフがこの政策を否定するまで残った).

2002/4/3 © Kuniko INOGUCHI 11

Nuclear Arms Race核軍拡競争

◆ Action-reaction in arms race 作用一反作用

US 1945 atomic bomb 1949 USSR US 1948 intercontinental bomber 1955 URRS

USSR 1957 intercontinental ballistic missile (ICBM)

大陸間弾道弾 1958 US

USSR 1957 man-made satellite in orbit 1958 US

人工衛星(運搬手段として重要)

US 1960 submarine-launched ballistic missile

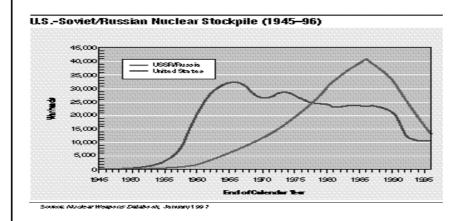
(SLBM) 潜水艦発射弾道ミサイル 1968 USSR

USSR 1968 anti-ballistic missile (ABM) 迎撃ミサイル網 1972 US

US 1970 multiple-independently-targeted warhead

(MIRV) 多弾頭個別誘導型ミサイル 1975 USSR

US-Soviet Nuclear Stockpile



p://www.ndu.edu/inss/sa98/sa98ch12.html

組つのは都市か基地か

Counter-value vs. counter-force strategy

- ★ 対都市戦略counter-value strategyは報復を招くために放棄。
- ◆ 対兵力戦略counter-force strategy: 基地攻撃により報復力を削ぐ。
- ◆ Targeting doctrine 目標設定構想
 - 1971年にNixon大統領が戦略的十分性(strategic sufficiency)の概念を示し、戦略核による確証破壊戦略は必要だが、米国の核戦略があらゆる事態に対応し得る十分なものになるためには核戦力の選択的活用の構想ば必要であるとした。これを受けて1974年でシュレジンジャー国防長官が同構想を発表し、慎重に選定した軍事目標への報復を段階的に加えることによる核戦争制御の核攻撃における柔軟反応戦略を提示。Carter政権の核相殺戦略countervailing strategy)に継承。
- ◆ Countervailing strategy: 全面核戦争より、限定核戦争が起こる可能性の方が高いという予想の下に、ソ連からの限定目的攻撃のどのような規模でもその効果を相殺しうるだけの報復攻撃力を保有することですべての戦略的段階で核抑止を実現しようとした。 % Kuniko INOGUCHI 14

核の冬 Nuclear Winter

- ◆ グ: ガンら天文学者は、核戦争の戦場にならにと想定される 南半球でも最終的には人類が死滅する可能性を示し、核軍縮へ の必要性の認識を広く政策界と市民層に広げることに貢献。科学 者が市民と知識を分かつことで、国際政治を影響する初期の事 例(epistemic community論の初期事例)
- ◆ 核の冬とは、都市や森林などが核攻撃で炎上し、大量のススが 爆風とともに舞い上がって成層圏に滞留する結果、太陽光線が 遮断されて地上の温度が全般的かつ長期的に著しく低下する現 象を指す。
- ◆ 米ソの核保有量の1%以下しか用いられない場合でも炎上しや すい目標に攻撃が集中した場合には、この現象が数ヶ月は続い て、生存者の大半は餓死するとセーガンは警告した。
- ◆ 日本についても、本土や近隣地域が直接攻撃を免れた場合、海 洋の熱容量を考慮しても人口の5割が餓死すると後の研究では 発表されている。

2002/4/3 © Kuniko INOGUCHI 15

Circullar Error Probable 半数必中半径

発射した半数の弾頭の着弾する半径 初期にはCEP値が高すぎ、報復力を削ぐ自 信なく、不使用につながる CEP値が低くなるのは1970年代の終わり INF軍縮につながる



- ♦ http://www.nuclearfiles.org/data/
- ♦ http://www.gwu.edu/~nsarchiv/nsa/publi cations/nh/
- http://www.nrdc.org/nuclear/nudb/datain x.asp
- ◆ http://web.bryant.edu/~history/h364proj/s umm_99/trainor/
- http://www.pjhealy.com/coldwar/arms.ht ml

